魔法の世界で守る者

妄想野郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法の世界で守る者

【Ｎコード】
Ｎ０５２５ＢＡ

【作者名】
妄想野郎

【あらすじ】
一人の男が始めた戦争に終止符を打つために追い続けた男たちがいた。彼らはただひたすら追い続た。そして、ほとんどの男たちが倒れ残ったのは老兵だけだった。（この作品は作者の妄想から始まったのでお見苦しい点があるかもしれません。がご理解をお願いします。）

終わりと始まり（前書き）

すべてを終えた老兵の前に現れたのは・・・

終わりと始まり

そこは海に面したホテルの最上階でレストランになっている。しかし、店内には客はおらず、壁に銃痕がたくさんあり、銃を握ったまま倒れている者が多数いる。電球の明かりは一切なく、月明かりと屋上で燃えているヘリの明かりがレストランの中央にある天井の大きな窓から入り辺りを照らしている。

そこには一人の屈強な老兵がガラスが散らばる床に座り壁に背を預けながら葉巻に火を付けていた。

「ふぅーー・・・」

吸い込んだ葉巻の煙りを天井を見つめながら吐く。
吐いた煙りがゆっくり昇るのを見ていた視線を正面に向ける。
その視線の先には天井の窓から垂れたケーブルがありケーブルの先には一人の男が月の明かりを受けながら首を釣って死んでいる。その男を見ながら老兵は五年前の事を思い出す。五年前のあの時、この男の属する組織のリーダーを殺すためにほとんどの部下を失ってしまった。結果は殺すことが出来たが、殺ったのは老兵では無く一人生き残った部下だった。

それから五年間、老兵は姿を見せず戦死したとおもわれていた。だが世界がまた老兵を戦場へと引きずり出した。矯正収容所にいたところをかつての部下によって救出され脱出し、部下の所属するチームの一員になった。

その時世界は目の前の男が起こしたテロによって崩壊の危機にあった。大国と大国が戦争状態におちいり世界を巻き込んだ三回目の

戦争が始まろうとしていた。

チームは、影からこの戦争を操るこの男を追いかけていたところ二つの隠れ家を発見する。チームは老兵と部下を主力するチームと、部下が訓練官として指導した奴と常にサングラスと頭蓋骨を模したバラクラバを付けた奴を主力するチームの二つに分かれた。

どちらも目的の奴はいなかったが頭蓋骨のチームは男に関するデータを手に入れるも味方によって殺されてしまう。老兵のチームも味方の襲撃を受けるが協力者によって逃げることに成功するも生き残ったのは老兵と部下だけだった。

老兵とその部下は、裏切った奴に復讐とチームの仇を討つためにたった二人で敵の基地に潜入する。

そして、熾烈な死闘の末に勝つことができたが、その最中に部下が胸をナイフで刺されてしまい致命傷を負ってしまう。

老兵は迎えに来た協力者を使い傷ついた部下と共に基地から脱出する。逃げ込んだ先で部下の治療をしてる最中に敵の襲撃を受けてしまった。そこから脱出する時に老兵は体の至るとこに入れ墨を入れた男を仲間にする。

それから二ケ月ほどたった時、ヨーロッパはロシアの侵攻に遭ってしまう。そして、この侵攻の裏にはこの男が操っていたのだ。それを知った老兵と2人の仲間は奔走する。そして、とあるホテルに男が来る情報を手に入れた3人は奇襲しようとする。

三人は老兵と二人の二つに別れ、老兵は単身でホテルに潜入する。

それを広場を挟んだ所にある教会の塔から見張りをして男が来るのを息を潜めていた。

そして、ホテルに男が来たのを確認して見張りのふたりがテラスにいた兵士を狙撃して老兵がその隙に部屋に突入するが部屋にいるのは数人の兵士だけで男はいなかった。老兵はこれが罠と瞬時に理解して逃げようとした瞬間部屋が爆発する。

それを教会の塔から見ていた二人は無線で呼ぼうとするが応答がなく、移動しようとした時に部下が仲間と共に教会の屋根に転げ落ちる。仲間が驚いて部下を見た刹那自分たちがいた塔が爆発した。しかし屋根はすぐに切れてしまいそのままダイブしてしまうが、運よく工事用の足場があり木の板を突き破り、落下の勢いを減らしながら落ちてゆく。

背中から地面にぶつっかたが意識は朦朧だがなんとかあるので頭を動かして部下を探すが、部下は瓦礫の下敷きにされておりピクリとも動かない。近くでは敵の銃声が聞こえる。近づいてくる姿があるので敵と判断するも体が動かず諦めようと思った時、近づいてきたのはさっきホテルで爆発に巻き込まれた老兵であった。

老兵は仲間と共に負傷した部下を守りながら銃弾の雨が降り注ぐ街の中から撤退していく。

しかし、傷口からの出血が激しく部下は息を引きとった。

そして、老兵は愛用していた拳銃を部下の胸に置いて小さな声で「すまない」といった。

同時に老兵は決意する。

あの男を必ず殺すと。

男がこのホテルのレストランにいることを知り、老兵は仲間と共に正面から乗り込んで行く。
敵の抵抗が激しいが何とかレストランまで来たが、仲間が敵のヘリからの攻撃で負傷し倒れてしまった。しかし老兵は立ち止まらない。ここまで来るのに犠牲になった者たちのためにも、ここで止まる訳にはいかないから。

あの男がヘリで逃げようとしたところを、飛び乗りパイロットと護衛を殺すが護衛が撃った弾が操縦席に当たり操縦が出来なくなってしまいビルの屋上に墜落する。

墜落した時に屋上に放り出された老兵がうつ伏せた状態で見たの床のガラスに写る自分で顔を上げ見たのは、燃え盛るヘリから出てくる男と間に転がっている拳銃だった。老兵は這うように進んでつかもうと瞬間、拳銃を取られてしまう。

男に銃口を向けられた老兵は自分が殺されること以外なにも感じずただ死を受け入れようとした。しかし、男が引き金を引こうとした刹那、銃声が聞こえたと同時に男の血が舞う。
音のほうを向くとさっき倒れたはずの仲間が拳銃を撃ちながら近づいている。老兵は終わったと思ったが男が仲間に数発撃った内の一発が仲間の眉間に当たってしまう。倒れてゆく仲間を見ていた老兵は怒りに燃え男に襲いかかる。

ガラスの床に押し倒した男の首を両手で渾身の力で握る。男は両手を外そうと抵抗するが、外れずかえって力を使いだんだんと力が入らなくなってゆく。その間にガラスに亀裂が広がってゆく。
男の力が抜けた隙を突いて、燃え盛るヘリから伸びていたケーブル手に取り首に巻きつける。そして、男のスーツの襟を掴み上体を持ち上げガラスにたたきつけて一緒に落ちて逝く。

男を見ていた視線をガラスが散らばる床に落とす。
そこには、老兵を中心にして血の池が広がりガラスの破片を飲みこんで行く。外ではパトカーの音が近づいている。
老兵は目をつぶり小さく呟く。
「終わったな・・・」と
そして、葉巻を持っていた腕が糸が切れたように床に落ちる。葉巻はそのまま血の池に落ちて灯が消えて逝く。

頬に温かい風が撫でる。

目をゆっくり開けるとそこはさっきのレストランだった。

（？・・・）

しかし何かがおかしいと感じはするもわからない。首を少し傾げて考えるも思いつくことは何もない。

すると、天井の窓から光る球が降りてきた。
考えることを忘れ凝視していると体の正面に降りてきて手を伸ばせば届く位置まで来た。
大きさはだいたいソフトボールぐらいはあるだろう光る球はゆら

ゆらと揺れている。

「誰だ？」

暫らくして老兵は思いきって光る球に聞いてみた。

「・・・」

「無視か？」

返答がないので威嚇するような声でもう一度聞いてみる。

またも返答がないので老兵は葉巻を吸おうとポケットから葉巻とライターを出して慣れた手つきで葉巻に火をつける。

顔を上げ天井を見つめながら吸い込んだ葉巻の煙を吐きながら思う。

（静かだな・・・・・・ッ！）

老兵の目が一瞬開きすぐに鋭い目になる。そのまま顔を光る球に向け落ち着いた声で問いかける。

「お前が知っていると前提して聞くが、」

「・・・」

「ここは“現実”じゃないな？」

その瞬間、光る球が爆ぜるように大きくなり世界が真っ白になった。

あまりの眩しさに瞳を閉じて腕で顔を隠すが、すぐに光は収まった。

瞳を開け腕をどけるとそこはレストランではなく壁や床、天井がすべて白で塗られた小さな部屋の中だった。

部屋には机とイスが二つありドアが二つあり、ほとんどが白で統一され、ドアの一つが黒色なだけだ。

部屋には老兵だけで他は誰もいない。

老兵は誰もいないことを確認すると机に背を向けて一つのドアに近づきドアノブを触る。

「そっちのドアでいいんかえ？」

誰もいない部屋で後ろから声をかけられ老兵だがドアノブから手を離しゆっくり振り返る。

声の主はイスに座っていて白いカップを持って何やら飲んでいた。

老兵は少し警戒しながらも机に近づき反対側のイスに座る。そして、反対側に座る者をじっくり見る。

見た目はかなりのご高齢に見え、髪の毛と髭はすべて白く髭は首を隠れるほど伸びている。体系は中肉中背といった具合で、服装は足首まで隠れる白いローブを着ている。

「あまり見られるのは好きじゃないんじゃが・・・」

「ああ、すまない」

どうやら結構見ていたみたいだな

「お主に聞きたいことがあるんじゃが、いいかの？」

「ああ。別にどうと言うことはない。こちらも聞きたいことがあるんでな」

「そうか」

そう言うと老人はカップを一口飲んで机に置く。

「なぜあそこが現実じゃないとわかったのじゃ？」
「音だ」
「音？」
老人は眉を顰めながら聞き返す。
「いつから気づいたのじゃ？」
「最初は怪しいと思うぐらいで分からなかったが、こいつで確信したよ」
そう言うと老兵はズボンのポケットから取り出して机に置く。
老人はそれを見て驚くように眉をあげる。
「ライター？」
「そうだ」
そして、老兵はライターを持って火をつける。
「こいつで葉巻に火をつけた時に静かだっただけだ。それと、その演技はいつまでやるんだ？」
話を聞いた老人は急に表情を崩して温和な表情になる。
「さすがわ特殊部隊の隊長なだけはあるな。騙してわるかった」
そう言うと老人は頭を下げた。
「気にするな、職業柄気づいただけだ」
それを聞いた老人は頭を上げる。
「ありがとう。ところで隊長殿は何が聞きたいのかな？」
「隊長殿はやめてくれ。　聞きたいことはここに来た理由とあのドアについての二つだけだ」
「おおそうじゃった」
忘れていたかのように言った老人は温和な表情か真剣な表情になり老兵も真剣な表情で待ち構える。

「ここと は違う世界に行ってある者達に協力してほしいのじゃ」
「違う世界？」
「そうじゃ。別の言葉で異世界とも言うな」
「パラレルワールドとは違うのか？」
「当たらずとも遠からずじゃな。ここと は違う決定的なのが魔法の存在じゃな」
「魔法？　あれか、ファンタジー系の小説によくあるやつか」
「そうじゃ。そして、もう一つあるんじゃよ。」
「なんだ？」
「お主らの仕事道具じゃよ」
「・・・・・銃の事か」
「そうじゃ。厳密には質量兵器と呼ばれるがな」
「理由は？」
「それはいずれ知ることだから気にしなくてよい」
「いや、しかし・・・」
「ドアについてじゃが、話していいかの？」

（このジジィ）
「今無性にお主を殴りたくなったのじゃが？」
「なんのことだ？」
「・・・いや、なんでもない」
「そうか、ならドアについて話してくれ」
老兵はそう言って後ろを振り向く。
「うむ、向かって左の白いドアが異世界への扉で、右がさっきお主が触っていた黒いドアが死の世界への扉じゃ」
気なる言葉あったので老人を見る。
「死の世界ってのは？」
「はっきり言えば死んだ時に行く世界じゃな。なんならお主が行った時どうなるか教えてやろうか？」
「いや、遠慮する。わかる気がするからな。」

自信満々に聞いた老人だが老兵の即答で一気に沈んで行く。
「そうか。なぜわかるんじゃ？」
どこか遠くのものを見るような顔で話す。
「たくさん殺して来たし、死なせてしまったからな、それ相応の世界だろうよ」
二人の間に気まずい空気が漂う。

（どうしようかのぉ）
老人はこの空気を変えようと考えていたら目の前の老兵がいきなり立ち上がり老人を見つめながら口を開く。
「ようするに白いドアに行けばいいんだろ？」
突然の行動に老人は気の抜けた返事をしてしまう。
「じゃぁ、行くか」
老兵はそのまま白いドアの前まで来て老兵は老人に背を向けながら問いかける。
「行くのは俺だけか？」
聞いた老人は優しい声で『大丈夫』と言った。
「頼もしい仲間がたくさん一緒じゃよ。だから安心して行け」
老兵は背を向けながら『そうか』と呟く。
そのままドアノブを握りひねる。開けると猛烈な光が老兵をつつみ連れて行く。

老人はそれをただ見つめていた。

終わりと始まり（後書き）

ご意見・ご感想・改良点ありましたらお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0525ba/

魔法の世界で守る者

2012年1月1日01時47分発行